

回想の鈴木信五郎先生

——ひとりの後輩として——

大道安次郎

昭和41年4月18日の朝、鈴木信五郎先生のみ霊が昇天された。それは同日の朝、家族の方と食事をされて、講義のため登校されようとする直前のお宅での出来ごとであった。まさに卒然とした昇天であった。生前とくに親しくして頂いていた私としては全く信じられぬことであった。早速かけつけた私に、病身をチェアに身を寄せられていた奥様が、「大道さん、とうとう先に行ってしまう」といわれて、私の手を堅く握ぎられた。

信五郎さん——後輩の私はいつもこう呼んでいた——は、私が神戸の原田の森にあった関西学院高等商業学部に入學したときには、すでに卒業されていた。私には大先輩にあたるわけである。間もなくアメリカに留學されたので、私の在學中は全然交渉がなかった。私が九州大学を卒業して、母校に奉職したとき、すでに信五郎さんは先輩教授であった。同じ同窓であったのと、また硬派でなかったことなどから、先輩としていろいろ指導して頂いた。当時同僚であった織田武雄さん（現京大教授）などと一緒にぶらついたり、旅行などもしたことがあった。東京で信五郎さんと一緒になったときなど、銀座で同じネクタイを買ったこともいまは悲しい思い出となっている。

信五郎さんは、戦時中に一度学院を離れられたが、戦後再び学院に帰えられた。矢張り母校を忘れられなかったのであろう。私は蔭ながら、そのことを心からよろこんでいた。しばらく関西学院短期大学に籍をおかれていたが、のちに大学商学部に移された。社会学部創設の動きがあったときに、ぜひにと懇望して信五郎さんを新設の社会学部にお迎えしたのであった。それには二つの主な理由があった。その一つは、広告論の講義を担当して頂くことであり、その二は、母校出身の大先輩であったからである。

信五郎さんの広告論は全く年期がはいっていた。わが国の広告論では、開拓者の一人であった。あまり論文や著書を出されなかったが、広告界では知名の士であった。高商の教授時代に信五郎さんが主宰し、指導された学生会の「広告研究会」は当時としては全くユニークな存在であり、活潑な動きを示して、当時の各大学がモデルとしていた程であった。その研究会で指導をうけた学生諸君の多くは、いまでは第一線で活躍している。信五郎さんの葬儀のとき、当時の学生諸君も参集されたので、私は帰途これらの諸君とともに近くの喫茶店で在りし日の信五郎さんのことどもをしのんだ。

ところで、信五郎さんは原田の森時代からの学院の伝統を深く身につけられている方であった。しかも熱心なクリスチャンであった。味噌の味噌くさいのは味噌でないといわれているが、信五郎さんはクリスチャンを顔にぶらさげているようなクリスチャンではなかったが、レーマンとして熱心なクリスチャンであったことは、教会での葬儀の際の弔辞からでもよくうかがわれる。

これはあまり表面に現われてはいなかったが、信五郎さんの奥さんに対する愛情のこまやかさには全く頭の下がるものがあった。信五郎さんの結婚は学生時代の恋愛の結果であった。長い地上の生活を苦楽とともに分かちながら送られたが、晩年不幸にして奥さんが病床につかれる期間が長く続いた。信五郎さんの晩年は痼疾の痔病も顧みず、この病身の奥さんの看護に献身されていた。入浴その他の身の辺のことがらのひとつひとつについて信五郎さんが気をつけていた。信五郎さんにはこうしたこまやかな愛情があった。それは静かな深い、温いものであったが、この愛情はまた学生諸君にも注がれていた。

絶えず笑みをたたえた温顔、そして自己をあくまで主張して押し通そうとしない謙譲さと寛容さ、それに建学の精神の生きた法燈、その信五郎さんは、静かに昇天してしまった。もう再びこの地上ではお目にかかれなくなった。しかし信五郎さんはいまも私のうちに、私たち社会学部のうちに生きつづけるであろう。在天の君のみ霊よ。絶えず私たちを見守り、私たちの導びきの星となって下さい。

(昭和41年11月13日謹記)